chojiai.jp

はる、

こうして「お別れの会」で、あなたに呼びかける日が来るとは思っていませんでした。胸の奥で、まだあなたの澄んだ声が聞こえる気がしています。けれど、いまここで言葉を手渡すことが、あなたから受け取ってきたたくさんの手紙へのお返しだと思い、拙いながらお話しさせてください。

訃報に接した朝、私は思わずポストを開けました。そこに、いつもの丁寧な文字で綴られた手紙が入っている気がしてしまったのです。何も入っていない現実を前に、時間が止まったようになりました。それでも、玄関先の鉢に咲いていた小さな花に目がいったとき、あなたが置いていってくれた「間」のようなやさしさを思い出しました。急がせない、比べさせない、そしてそっと誰かにつないでいく、あなたの歩幅が、私の呼吸を整えてくれました。

私たちが出会ったのは中学の図書室でしたね。新刊コーナーで同じ本に同時に手を伸ばして、譲り合いのまま二人で床に座って読みはじめて、司書の先生に笑われたっけ。あの日から、放課後の通学路や、夏のグラウンドの熱気や、冬の白い吐息の中に、いつも「はる」がいました。大学は別々になっても、節目のたびに互いの駅に降り立ち、小さなケーキや、封のされた便箋や、道端の季節の花を手渡しながら、近況を報告し合いました。社会人になってからは、仕事の年度初めと誕生日、それから年の瀬に、必ず「おめでとう」と「おつかれさま」を交換するのが、私たちのきまりでしたね。

忘れられないのは、私が受験で不安に押しつぶされそうだった夜のこと。翌朝、ポストに入っていた小さなメモには、あなたの字で、私の弱さではなく、私がこれまで積み上げた小さな「できた！」が、日付とともに並んでいました。「今日はここまでで大丈夫」「あとはよく眠ること」その二行で、私は泣きながら机に向かうことができました。誰かの長所を見つけ、言葉にして渡す達人、それが、はる、あなたでした。

長野県松本市で育ち、大学で教育学を学び、小学校の教員として十年以上。あなたは子どもたちの「できた！」を増やすために、ひとつずつ工夫を重ねていましたね。図書室の再整備では、背の低い子が手に取りやすい棚の高さや、表紙が見える面出しをこつこつ調整し、人気の本の横に、似たテーマの本をそっと並べて、「好き」が連鎖する仕掛けを作っていました。朝の朗読を地域に広げる活動では、忙しい保護者さんにも参加しやすいよう、台本の余白に読みやすい区切りを入れて、緊張をほどくお茶時間を用意していました。「読書週間」は、ただの行事ではなく、通学路の掲示や商店のポップまで巻き込み、まち全体が静かな物語を共有する時間になっていきました。

職員室でのあなたは、芯が強く、穏やかでした。誰かが「うまくいかない」と肩を落とすと、あなたは結論を急がず、まず相手の話を最後まで聞きました。「どこで子どもの目がいちばん輝いたか、そこから考えてみよう」と、そっと視点を返してくれる。ときには自分の失敗談を先に差し出して、「だから次はこうしてみたい」と一緒に地図を描く。あなたの隣に座ると、できない理由ではなく、できる道筋が見えてくる。それが、はるの力でした。

休日のあなたは、静かな人でしたね。朝、窓辺の鉢に水をやり、読みかけの本にしおりをはさみ、台所で季節の果物を煮て、瓶に詰める。その合間に、短い手紙を書く。遠くへ派手に出かけるのではなく、行き先を一つだけ決めて、そこに丁寧に触れる旅を選ぶ。帰ってきたあなたの鞄からは、土地のパンフレットと押し花、そしてその場所で出会った人の名前が、いつも大切に取り出されました。あなたの「静かな旅」は、いつでも人への挨拶と、次に会う誰かへのお土産話につながっていました。

あなたが大切にしていた言葉、「急がない・比べない・繋げていく」。授業づくりでも、子どもたちが同じ速さで進むことを求めず、小さな前進を、名前を呼んで祝っていましたね。「今日はここまで」「ここからは一緒に」その合図で、どの子も置いていかれない。行事の打ち合わせでも、成果を競うのではなく、来年の担当者が楽になるよう、記録と工夫を残していく。あなたにとっての達成とは、いつも誰かへ渡されるバトンの形をしていました。

ご家族の皆さま、勇さん、由紀さん、千夏さん。そして愛猫のそら。はるは、折にふれてご家族の話をしていました。休日の夕方、台所から漂う匂いの記憶や、食卓で交わされた何気ない会話のあたたかさを、まるで目の前で見てきたかのように語ってくれました。ご両親のまなざしが、はるの「人の良さを見る目」を育て、千夏さんとのやりとりが、はるのユーモアを磨いたのだと感じています。そらの話になると、あなたの声は少し高くなって、写真を見せながら、「今日も元気」と笑っていました。ご家族がどれほど大切だったか、私たちはよく知っています。どうか、はるが周囲に配っていたやさしさを、今度は皆さまがご自身にも向けてくださいますように。休むこと、頼ること、泣くことも、はるがきっと「それで大丈夫」と背中をなでてくれるはずです。

ここにいる多くの人が、あなたの手紙を覚えています。白い便箋に、ゆっくりと置かれた丁寧な文字。嬉しいときは喜びを大きくせず、悩んでいるときは不安を急がせず、余白に季節の花の絵が添えられていました。花屋の軒先で、ふとあなたを思い出す人が、これからたくさんいるでしょう。小さな花束を手渡すときの、あなたの指先のやさしさを、私たちは恋しく思うでしょう。

はる、あなたの机にあった「皆の好きが輝く教室」というメモ、私はそれを、これからの合言葉にします。教室だけではなく、職場も、家庭も、友人同士の集まりも、そうでありたい。誰かの「好き」を探し、言葉にして、光を当て合う場所にしたい。あなたが子どもたちにしていたように、私たち大人もまた、小さな「できた！」を見つけて、たがいに渡していきます。

最後に、あなたの言葉を借りて、ここにいる皆さんと約束をしたいと思います。「急がない」。いまの悲しみを、急いで片づけません。「比べない」。それぞれの歩幅で、思い出と向き合います。「繋げていく」。あなたからもらった手紙のように、誰かの心に届く言葉と行いを、次へ手渡していきます。あなたが灯してくれた静かな明かりを、私たちの暮らしの中で絶やさないように。

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成

はる、長いあいだ、そばにいてくれてありがとう。中学の図書室で始まった友情が、ここまで豊かな時間を連れてきてくれたことに、心から感謝しています。これからも、本屋の角や、朝の教室の窓明かりや、夏の道端の花に、あなたを見つけていきます。

どうか、やすらかに。あなたが誇りに思ってくれるように、私たちはそれぞれの場所で、小さな前進を重ね、次の誰かへとバトンを渡していきます。

ありがとう、はる。また、手紙を書きます。

この弔辞は chojiai.jp
で作成されました。いくつかの質問に答えて、今すぐあなただけの弔辞を作成しましょうc
hojiai.jp

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成